

あの日の誓い、今ここに。
に。

餅煮込み

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——…一六〇キロのストレートを投げられる人。

きっかけは一人の少女の言葉だった。

一六〇キロのストレートを打ちのめすために、今日も俺はバットを振るう。

目次

2	1
9	1

一体どんな経緯でそんなことを聞いたのかは覚えていないが、幼馴染に訪ねたことがある。気になる男子とかいないのか、と。

他意はなかったはずだ。不意に気になって聞いてみた、ただそれだけのこと。

幼いながらもませていた俺たち。だから可愛らしい反応を見られると思っていた俺の予想に反して幼馴染はそっけなくいない、とだけ返した。

だが、俺はそこで止まらなかった。

続いて俺の口から飛び出したのはならどんなやつが好きなんだ、という疑問の言葉だった。

今となつてはデリカシーのないやつだな、なんて苦笑いを浮かべてしまうが、あのころはなんにでも手を出す年ごろだったのだ。

忘れもしない、あの光景。バッテリーセンターで順番待ちをしていたあの夏のころ。俺は今でも、あの子の台詞を覚えている。

——……一六〇キロのストレートを投げられる人。

忘れもしない、あの言葉。可愛い妹分を奪うやつを滅多打ちにしてやる、そう誓った

夏のこと。俺——黒須遊は今も誓いを胸にバットを振るう。



バネの軋む音に合わせ、リズムを取りながら体重を軸足である左足に乗せる。

地面と水平にバットを軸足方向に引き、ボールが投射されると同時にバットを振り切った。

軽い感触に、小気味よい金属音。そして右足に激痛。

「ぐおっ!？」

反射的にうずくまり、強打した箇所到手を添える。

軟球だから大事にはならないだろうが、痛いものは痛い。

悶絶している間にも機械は止まることなくボールを吐き出す。それをもつたいないな、と眺めていると、小馬鹿にしたような笑い声が聞こえた。

「なんだよ?」

「べつつにー。楽しそうだなって」

つい絡んでしまった俺に、隣のレーンでバットを振るう少女——黒羽あおいは力みのないフォームで綺麗に白球を弾き飛ばしながら答えた。べつつに、と言っている割には今

もクツクツと笑って肩を震わせているが、まあ気にしないことにしよう。

「すつげー楽しいよ。いつも通りキャッチボールからのバツセン、いつも通り過ぎて今日引つ越すことを忘れそうだ」

今日、俺は生まれ育った町を離れる。

それはすなわち生まれた時からお隣さんだったあおいとも離れるということだ。俺的には涙を誘う感動的な別れを演出したかったわけだが、どうも俺たちには無縁のものらしい。

「あー、そっか。引つ越すんだ。忘れてた」

「おいこら、仮にも野球の練習付き合ってもらってた相手に言うことじゃないだろ」

足の痛みが引き、バツティングを再開しながら軽口を叩き合う。

先ほどはインのボール気味の球を打ちに行つたから自打球になつたわけで、無理に振らなければもう足には当たらない……はず。

「ずつと会えないってわけじゃないからなー。いつそのこと引越し先がブラジルとかだったらお土産の一つでも用意したのに」

「電車乗ればすぐ会える距離だもんな。でも大丈夫か？」

「なにが？」

「プリント失くした時とか。もう見せられねーし」

「子供扱いすん、なっ！」

あおいの気合の入った声と共に快音が響く。弾かれた球は、ライナー性の弾道を描きホームランと書かれたプレート——の横のネットに着弾した。

「ちえっ、当たると思ったのにな」

「残念、惜しくても当たらないと意味がないんだよ、っと」

次いで、俺の軽い調子のノリから弾かれた球は、まっすぐプレートへと吸い込まれた。気の抜けたパンパカパーンという機械音をBGMに、あおいへとドヤ顔を送る。

「今日は俺の勝ちだな。引越し前の餞別、どうもありがとう」

ホームラン打つまで帰れまテン、俺の勝ち越して終わつたな、と言うとあおいはまだゲームが終わっていないにも関わらずこちらに顔を向けムスツとした表情のまま押し黙った。

なにか言いたいことがあるのか。そう思って次の言葉待っているが、なかなか口を開かない。

図らずも見つめ合う形になったわけだが、俺はどうするのが正解なのだろうか。

幸い俺らの後ろに待ち人は居ないので、打たずにボックスを占領しても店員に白い目で見られるだけで済むがいつまでもこのままというわけにはいかない。

とりあえずきつかけを、と口を開きかけたその時、あおいが口を開いた。

「……いから」

「え？」

思いもしなかったあおいの発声に、前半部分をうまく聞き取れなかった。

俺の気の抜けた返事に、あおいは苛立たし気に再度口を開いた。

「だから！ 勝ち逃げは許さないって言ってるの！」

半ばやけくそに放たれた言葉。

その意味を反芻し、考える。

勝ち逃げ？ 今のどちらが先にホームランを打つかの競争のことだ。きちんと数えてはいないが、俺の勝ち星の方が多いから。

許さない？ それはつまり俺が負け越すまでやるという意味。だが、今日はもう時間が迫っている。

以上のことから導き出されることは、だ。

「なんだよ。やつぱさびしいのか？」

たまにはこつち来いよ、ってことなんだろう。素っ気ない態度とってたくせに可愛いやつめ。

「そつ、そんなんじゃ……！ もういいつ！」

そう言っただけは逃げるようにボックスから出て行ってしまった。固まっておく

必要がないため俺もバットを所定の位置に戻し、早足であおいの後を追う。

てつきり敷地の外へ出ていっていると思っていたあおいは、律儀に出入り口で待つてくれた。

俺が追い付いたことによりあおいは無言で歩を進め、俺も黙って做う。

それからはお互い無言だった。通い慣れたバッティングセンターと家を繋ぐ道のり。会話がないなんてことはさらだったから慣れているが、やはり今日は無性にそれが寂しく感じる。

「……私たちももう四年になるんだし、向こう行ったらリトルにでも入りなよ」

ぼつり、と。不意にあおいがそう漏らした。

「……あおいは、どうするんだ？」

「ちよつと迷ってる。女の子だからって理由で嫌な顔されそうだし」

「そっか……」

あおいは昔から野球が好きだった。数年前まではクラスメートと一緒に白球を追いかけていたりしていたが、いつからか男女混じって遊ぶのは恥ずかしいという風潮が広がり、かといってあおい以外の女の子たちが野球をするということもなく二人でキャッチボールやバッセンに通うのが常となっていた。

本当は野球をしたいくせに、女の子だからという理由で我慢している。そんなあおい

が見ていられなくなって、二人で出来ることをやろうと誘ったのが始まりだったか。今思えば、どちらもよく途中で辞めなかったものだ。と我ながら感心する。

俺が居なくなるとあおいはどうするのだろうか。これまでしてきたことを俺抜きでやるのだろうか、それとも野球自体を辞めてしまうのか。一人でやるにしても、大事なものを切り捨てるにしても、哀しいのに変わりはない。

「野球、辞めるなよ」

自然と、言葉が口から溢れていた。

「俺も入るから、あおいもチームに入れよ。リトルでも軟式の野球チームでもいい。女だからって文句言うやつはプレーで黙らせてやればいい。だからさ、次の勝負は一对一の個人戦じゃなくて、九対九のチーム戦で決着着けよう」

言い切ったところで、ピタリとあおいの足が止まった。

どうしたものかと振り返ってあおいを見るが、俯いているため表情を窺い知れない。

「どした?」

「……リトルと軟式別々に入っちゃったら試合出来ないじゃん、それ」

あおいが顔を上げると、困ったように笑う顔があった。

たしかに。同じ野球でもジャンルが違うから試合は出来ない。

「なら今決めよう。俺はリトルリーグのチームに入る」

「私まだやるとは言っていないんだけど？」

「待ってるよ、グラウンドで。それとも俺の不戦敗でいいか？」

「……あー、もうっ！ やればいいんでしょ!？」

「おう、約束だ」

言って、踵を返して帰り道を急ぐ。

いつもと同じ帰り道。けれども帰る家が違うことに実感が湧かず、このままだと明日も隣を歩く彼女を誘ってバツティングセンターに行ってしまうそうだ。

しかし、たった一つのことだけはハッキリとしている。

「——俺たちは、これから野球を続けるんだ」

なかば強引に押し付けたと言つてもいいあの約束から十日ほどの今日。俺は緊張気味に教卓の前に立っていた。

「えっと、黒須遊です。バツセン通いが趣味です。よろしくお願いします」

嘸まないうようにゆくりと一文字ずつ吐き出し、そして一礼する。

四年の始業式にやってきた転入生。それが視界いっぱいに映る彼らの、俺に対する評価だろう。

当たり障りのない挨拶にしたつもりだったが、バツセンってなにといい囁きがちらほらと聞こえるあたり言い方をまずつたみたいだ。

バツセンとはバツティングセンターの略です、と付け加えなくなつたが、なんだか恥ずかしいのでやめておこう。

悪い印象を与えないよう貼り付けておいた笑顔を崩し、隣に並び立つ担任の先生に視線を送ると、やっと先生が口を開いた。

「黒須はこの町に来て日が浅いからみんな色々な色々教えてあげるんだぞ。黒須の席は小森の前……あそこだ、空いているところ」

言われ探してみると後ろから二つ目のドア側に空席が一つ。なら、その奥の小柄で内気そうな子が小森だろうか。

小森の隣の少年が嫌な笑みを浮かべてこちらを見ているのが気になったが、注目が集まっている今アクションを起こせないのであえて無視をして席に座る。

そうして新入生の挨拶という一つのイベントがおわり、ホームルームが始まった。

「新しい仲間を迎え、君たちは四年生になった。そこで早速だがこのクラスの委員長を決めたいと思う」

誰か立候補したい奴はいるか、という先生の問いかけに教室に緊張が走った。

みなが目で牽制し合う。お前やれよ、やだよ。言葉ではなく目で語る。

自ら面倒ごとに首を突っ込むモノ好きは居ないらしく、わずかな静寂が教室を支配した。

あーあ、誰か手を挙げるまで進まないパターンだぞ、これ。

時間かかるな、と思っていたら真後ろから先生、と声が上がった。

「お、沢村。やってくれるか？」

後ろからの声で小森ではない、となると先ほど気になった少年が沢村か。

みんなが嫌がる委員長を引き受けるようなお人好しのタイプではないと雰囲気で判断していたため、少々おどろいた。

「いえ、僕は自信がないので小森くんを推薦しようかなって」

短く、小さな悲鳴が上がった。おそらく小森のものだろう。

首を左に回し、沢村の顔を見る。意地の悪そうな笑みを浮かべていた。

顔で判断してゴメンと内心思っていたわけだが、そんなものは必要なかったようだ。

沢村の発言に間髪入れず、数人の男子の同調の声上がる。

「先生、私やりませう」

委員長が小森に決まりそうな中女の子が言った。

俺から見て左の、教室の中央後方に座る勝気そうな女の子。先生とのやりとりから清

水と言うようだ。

委員長は清水、そしてその隣に座る本田とやらが副委員長。そう決まり、沢村は苛立たしげに舌打ちをした。

なるほど、沢村はいわゆるいじめっ子というものらしい。さつき同調していたやつらは取り巻きで小森はいじめられっ子。クラスの奴らは基本干渉しないが、清水はその例外で沢村たちはいじめ顔をしないうってわけか。

前の学校ではいじりいじられはあったが、こんなあからさまなものを見るのは初めてだ。まあ、なんというか。

「……めんどくせえな」

主に俺を見定めようとする沢村の視線が。



「か、返してよう……」

「ははっ、ほらパスだ！」

新参者を珍しがるクラスメートの好奇の視線に耐えきり、靴を履き替えて残すは帰るのみとなった俺の前に試練が下った。

「……こんな目立つ場所でよくやるな」

視線の先で靴が空を舞う。

端的に言うとは沢村プラス取り巻きが小森の靴でサッカーをしていた。靴箱から校門をくぐるには避けて通れない噴水の前で。

通りづらいじゃん帰れないじゃん。何故こんな場所でやろうと思ったのか。

先生を呼んで注意してもらったとしても小森の性格から遊んでいただけで押し切られ俺も巻き込まれる可能性が濃く、かといってそのまま帰るのも後味が悪い。

直接止めるか？ でも転入初日に目をつけられるのも……。

こうなりや出たとこ勝負だ。真横を堂々と歩いてやりや辞めるだろ。

そう決意し歩みより、だんだんと近付いてゆく。だが俺の姿を認めてなお、沢村たちは小森の靴を蹴ることを辞めなかった。

「そらっ、シュートだ！」

噴水の脇を通ろうとしたとき、なにかが俺の顔目掛けて飛んできた。それを反射的にキヤツチし、地面に落とす。

いちいち確認しなくてもわかる。沢村が蹴った小森の靴だ。

「靴でサッカーするのがこの学校のブームなの？」

「なかなか楽しいぜ。転入生もやるか？」

「あいにくと野球派なんでね。あと水辺でやらない方がいいよ、濡れたボールほど触りたくなるものはないから」

「その噴水がゴールなんだよ。転入生、パスくれよ」

「ハイパスっ、なんて構えてる沢村を見て思う。やっぱ面倒なことに巻き込まれた、と。ここでパスすれば小森に悪いししなければ気不味くなる。どちらにせよ穏便に済ませることは出来ないようだ。」

「おのれの良心をとるか今後の平穩をとるか。空を見上げて考えるほどには難しいところだ。」

「おい、早くしろよ」

「もうこつちでしようぜ」

業を煮やした取り巻きたちが催促し、耐えきれずに転がっていたもう一足で再開しようとしたそのとき、

「面白そうじゃん。俺もまぜてよ」

声が増えた。

目を向けると靴が脱げて尻餅をついた取り巻きの一人と副委員長の本田が見える。

「噴水がゴールだったよね？」

また俺の方へ靴が飛んでくる。今度は手を伸ばさない。

本田が蹴った靴は山形の弾道を描き、噴水へと放り込まれた。

まさかの展開に俺も含め全員が惚けていると本田が不思議そうに口を開いた。

「あつれー？ おかしいな、全然面白くないぞこの遊び。喜ぶとしたらせいぜい低学年の子供くらいだな」

わざわざ怒らせるようなことを言いやがって。まあ、本田に沢村たちの気が逸れて俺は助かるんだけど。

勝てないと悟ったのか逃げるように去って行く沢村と取り巻きの奴らを尻目に足元に落ちている靴を拾って小森へと駆け寄る。

「ほら、靴」

「あ、ありがとう……」

「俺じゃなくて本田に言つてやりな。本田来なかつたら片方は濡れてただろうし」

「あつ、本田くんもありがとう」

「いーよ別に」

これで懲りてくれればいいんだろうけど、そうはならないだろう。

せめて小森がキツパリと意思表示してくれれば楽なだけだ。

「おい小森！ 早く行くぞ！」

「う、うんっ！ ……えと、ごめんねっ」

沢村の呼びかけに小森は申し訳なきさうに俺と本田に謝り駆けて行つてしまった。

「なんだありゃ」

「ほんと、めんどくせえな……悪いな本田、助かった」

「さつきも言つたけど別にいいよ、えつと……名前なんだっけ？」

「黒須だよ」

健気に沢村に駆け寄る小森の背を見つめ、そんな会話を繰り広げる。

本田とはそれなりに仲良くやれそうだ。

「俺に歯向かつて楽しい学校生活送れると思うなよお前たち！」

よくもまあバトル物のちよい役が言いそうなことを口に出せるもんだ。俺なら恥ず

かしくてくちが裂けても言えない。

「厄介なのに目をつけられたな」

「黒須もだろ？」

「えっ？」

——俺に菌向かって楽しい学校生活送れると思うなよお前たち！

あれ、お前たち？

「俺、特になんにもしてないんだけど？」

「ま、なっちまったもんなしようがないさ」

「いやそうなんだけどさ。でも、ええ……」

転入初日、俺の学校生活は前途多難なようです。あおいとバツセンに行きてえ……。